

★熱田層の工事現場を見せてもらってきました。熱田層の分布地はほとんど市街地化しており、熱田台地上では工事の時以外は露頭らしきものは見られません。この場所は昭和区御器所で、近くには御器所台地最高地にある尾陽神社（最初と最後の尾張藩主を祀る）があります。熱田層上部の地層の特徴である黄色味を帯びた淡褐色の砂層（陸成層）でした。会員の皆様もどこかにお出かけになり興味を引くものを（地層に限りません）見られたときはご投稿いただきたいなと思います。よろしくお願いいたします。



図1 熱田層上部（名古屋市昭和区）

※この会報に使われる写真や図は、出典が明記されているもの以外は村松所有の標本や、現地で観察した露頭などを自分で撮ったものです。出典さえ明記していただければ自由にご利用ください。

大地をつくるもの（4） 名古屋の地形 2 名古屋の水環境

熱田台地上では、地表での水の確保は十分ではなかったと推定されますが、名古屋城内には井戸がいくつも見られますので、熱田層中の地下水利用はある程度できたようです。天守閣内のものは20mほどの深さだったようです。熱田層分布地域では千種区の古井の坂にも井戸があり、昭和区滝子通は広見池の水の一部が南へ流れ滝になっていたといわれます。そのあたりは「御器所三泉」という湧水があったそうです。熱田層のくぼ地や崖からだったのかもしれませんが。

台地の北側に続く崖からはあちらこちらから湧水がみられました。まだそれほど高くなっていなかった頃の熱田台地（熱田層分布地）を流れたかつての矢田川が、その流路（河川敷）に砂礫を堆積しました（厚さ数m）。これが大曾根層で、現在の国道41号線とJR中央線の間に分布しています。昭和区鶴舞公園も大曾根層分布地域にあり近くにビール工場があったことなどからもわかるように地下水が豊富だったようです。鶴舞図書館の南や東の崖からは水が湧き出し床面も水浸しの状態でした（右写真）。



図2 鶴舞図書館の湧水

東区や北区には清水や水筒先町など湧水から名づけられた地名が残っています。かつては酒蔵もあったようです。

江戸時代にはこの大曾根層分布地域には、尾張藩主をはじめとする藩の重役の屋敷がつくられ池を持つ庭園がありました。大曾根の曾根は川の氾濫で砂礫の多いやせた土地から由来するそうです。

熱田台地にも凹凸があり、名古屋城築城時に山を削り谷を埋めて平坦な土地にしたそうです。現在の伝馬町通本町の交差点あたりは峠になっており、飯田街道など諸街道の起点となりました。白川公園の北

東部あたりからは紫川が流れ、現在では地下水路となって洲崎橋下流に流出しています。

名古屋を流れる河川には、堀川、新堀川、山崎川、天白川、庄内川などがあります。庄内川を除き上流に大きな水源を持たない河川は下水処理水や雨水などによって河川を維持しています。名古屋下水道は日本最初（1930年）の活性汚泥法用いた堀留処理場と熱田処理場が有名です。

1) 堀川：庄内川から分流し、矢田川を暗きよで横断して、熱田台地の西に沿って南下し、名古屋港へ注ぐ延長16.2kmの河川です。

2) 新堀川：東京砲兵工廠熱田兵器製造所の建設に際して水運と排水の目的で精進川を運河化したもので、今池は精進川の水源の一つのため池でした。現在は堀留下水処理場から南に流れ、堀川に合流します。かつては精進川と呼ばれ、川幅が狭く、曲がりくねった川で洪水が多かったため、明治の終わりに改修され「新堀川」と呼ばれるようになりました。

3) 山崎川は千種区猫ヶ洞池に源を発し、南西に流下し、名古屋港へ注ぐ13.6kmの河川です。東山公園内の上池からも流れ込んでいますが上流部の水路は地下に隠されています。豪雨時などでは、猫ヶ洞池から地下を通して矢田川に水を逃がしたり、地下にいくつもの貯水槽がつくられています。ただ歩くだけではわかりませんが、鬼頭保氏によってその水系が詳しく紹介されています（図3）。

4) 天白川は日進市東部から流出し、名古屋港に注いでいます。また、名古屋市と上流の日進市の下水処理場からの下水処理水も流れ込んでいます。山崎川と合流させたこともあったようです。

5) 庄内川は、岐阜県恵那市山岡町にある夕立山から流れ出ており、春日井市付近から濃尾平野に出ます。岐阜県内では土岐川、愛知県内では庄内川と呼ばれます。名古屋市北部で新川を分派し、その下流で矢田川と合流し、熱田台地を大きく回り込むようにして伊勢湾に注いでいます。かつては、多治見や土岐などの窯業地帯からの排水で白く濁った河川でした。

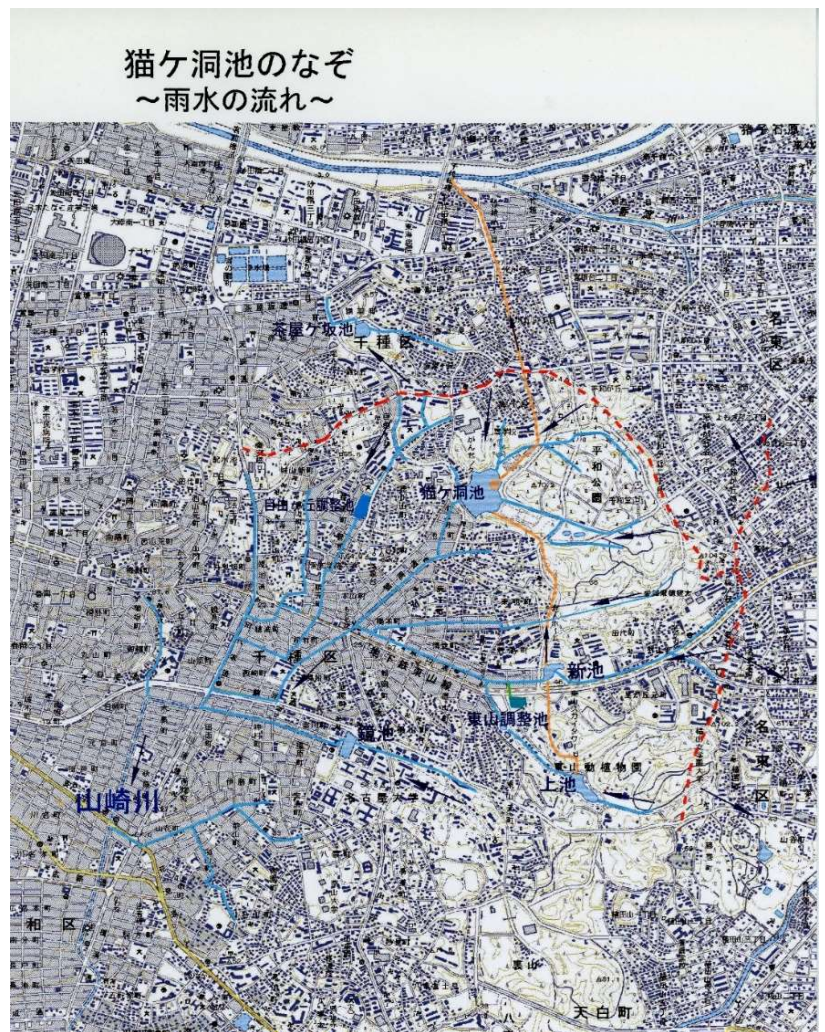


図3 山崎川水系 (鬼頭保 原図)

新川は庄内川の河口付近一帯の干拓などによる河床上昇に伴う洪水防止と多くの支川の流れをよくするため、これらの河川を直接海に導くよう、江戸時代後半に開削された庄内川のバイパスです。旧楠村と旧山田村の境の庄内川の右岸堤を低くした五合堰＝新川洗堰は東海豪雨の時話題になりました。

日本のジオサイト 2 筑豊炭田のボタ山

福岡県の筑豊地域は一大炭田地域でした。そのくずともいえる低炭質の部分や、松岩（後述）が捨てられてできたボタ山がその象徴ともいえるものですが現在はほとんど残っていません（自然発火や崩れの危険が高いそうです）。また、残っているものも樹木が生い茂り遠望した限りでは普通の山と区別が付きません。図 4 は飯塚市忠隈地区にある筑豊富土と呼ばれるボタ山で、近づくと松岩や石炭片などが散らばっているのが見られます。図 5 は雑木林を切り開いて見つかった飯塚市の原口炭鉱大門坑跡で、地主の安藤喜八郎氏に案内していただき、発掘当時の写真もコピーしていただきました。坑道内は埋没されており、中へは入ることはできませんでした。図 6 は宮若市光陵グリーンパークで石炭を含む地層が見られ、周囲には松岩がごろごろしていました。図 7 は宮若市で見られた松岩を組んだ石垣です。松岩は炭層中に含まれる珪化木の化石で著しく硬く、採炭機やさく岩機の刃先をいため採炭の邪魔になったため嫌われ者だったそうです。産状は文献や石炭記念館などへの質問などで調べましたが、ほとんどわかりませんでした。捨てられた松岩は、石垣や庭石などに使われており、あちらこちらで見ることができます。東海層群中でも珪化木はあちらこちらで見つかりますが、大きさ、量ともに小規模です。



図 4 筑豊富土（ボタ山）



図 5 原口炭鉱大門坑跡



図 6 光陵グリーンパーク



図 7 松岩の石垣（若宮市）